

環友 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
珊瑚集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	29
6月号月評	30
惠贈句集拝見 (47)	32
惠贈俳誌拝見 (17)	34
特別作品「花巻ファンタジー」	36
琥珀集作品鑑賞	38
珊瑚集作品鑑賞Ⅰ	39
Ⅱ	40
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	41
俳誌交歓	43
句集「うらら」共鳴句	44
他誌転載	46
姫の国父の蒼天 (39)	48
徳島一泊吟行	50
ひこばえ会通信 (16)	52
エッセイ「さくら」	53

今月の一句

水車のみ光陰涼し高札場

桂樟蹊子

(昭和六十一年作)

木曾路の古い宿場町妻籠の高札場をよまれたものである。「何々候事」など行政の高飛車な姿勢は快く思われなかったようである。しかし高札場の前そ流れる山川と、仕掛けられている水車の動きに「時間」の流れを涼しく感じられたと言う。

隆子

2700グラムの生命

塩路隆子

奏かなでてふ姫賜りぬ桜どき

月満ちし肢体の自在さくら季

玻璃越の泣き声うらら初対面

泣き声は嬰の自己主張日の永き

賜りしいのちの重さ囀れる

未来なる春光つかむ赤子の手

乳足りし嬰の深ねむり木の芽風

六月号光耀抄

塩路 隆子選

筆箱にトンボ鉛筆昭和の日
花菜風母屋に残る牛の部屋
タグ付けし仔牛の値踏み春ざるる
嫁ぐ子に料理伝ふる桜鯛
折鶴に息ふきこみて瀧の夜
花衣着せてやりたし伎芸天
フアールブルは子の愛読書夏隣
辛夷咲く里は茅葺鳶の笛
雨上がり密かに木々の芽吹く音
独眼竜政宗ごっこ風光る
種袋写真信ずるほかは無し
山道具のこす廃屋落つばき
うぐひすのこ糸藍色に南紀浜
傾きはその身の重さヒヤシンス
花ふぶく句碑歌碑いくつ佐保堤
植糸し苗揺るれば彩の風となり
裸婦像の仰ぐ大樹や百千鳥

塩路 五郎
鈴木 照子
山口キミコ
竹内 悦子
森下 康子
笠井 清佑
田下 宮子
坂上 香菜
辻 香秀
常田 創
北尾 章郎
坂根 宏子
片岡久美子
宮田 香
小林 成子
大島みよし
五十嵐 勉

きらきらと淡海は春の日とあそぶ
 目も鼻も無きが如くに花粉症
 春筍茹でてやうやく昼の閑
 京野菜いただく春の日の恵み
 鴨引きて人は虚ろの日をしぼし
 築山と白砂の阿吽春の庭
 釣り上げて恵比寿こちや桜鯛
 沖繩の珊瑚の海辺さくら咲く
 花の夜は居酒屋となる峡五軒
 畦行けば星の数ほどこいぬふぐり
 夜の桜浮かれ祇園を眠らせず
 春の宵小猫をさがすびら揺れて
 母見舞ふ小さき鉢の桜草
 放鳥の朱鷺の抱卵佐渡の景
 春泥の千本ノック終りけり
 春の葱たらこパスタに絡めけり
 太極拳落花浴びつつ気を吐ける
 鶯に藪売る話聞かせざる
 よりどりの干物を選び島の春
 あたたかやエレベーターに三つ子載せ

伊東 和子
 伊藤 純子
 大松 一枝
 岡 佳代子
 小澤 菜美
 和田 郁子
 藤見佳楠子
 増田 一代
 松岡 和子
 三川美代子
 宮崎左智子
 石川かおり
 前川ユキ子
 西垣 順子
 阪本 哲弘
 能勢 栄子
 井口 淳子
 国包 澄子
 高谷 栄一
 中川すみ子

鉛筆の芯の尖りや木の芽どき
 スーパーに若き尼憎や春キャベツ
 東風募り島影に海猫吹寄する
 藍町の栄枯盛衰ミモザ咲く
 潮騒の九十九里浜春ねむき
 鳥帰る頸のるり色光らせて
 花供養吉野太夫を偲ぶ寺
 春風や女優を真似て短髪に
 出足よき我がエコカーや春の風
 多羅葉に託す爪文字卒業す
 長堤の花や一里が人の波
 念仏の黒衣街往く三・二一
 嫁からの身ごもる報せ桜草
 春日影ロケの役者の立ち化粧
 ボンネットバス走る祖谷溪木々芽吹く
 春の日の洩るる竹林鋏光り
 水音にひらく椿や冠木門
 おらが春瓢々として野に出づる
 個々の戸に自慢の鉢や梅の里
 諸子舟つと流さるる湖の風

紀川 和子
 小西 和子
 落合 晃
 山本 孝夫
 栗倉 昌子
 和田森 早苗
 飯田美 千子
 中井登 喜子
 長濱 順子
 中村ふく子
 中本 吉信
 難波 篤直
 西村 敏子
 田中 浅子
 田中 芳夫
 津田 富司
 辻 知代子
 笹井 康夫
 佐用 圭子
 杉本 綾

甘き香を父母にささげるフリージャー

春光を載せし小川の奔りけり

日溜りに猫戯るる枝垂梅

曲線を描く城壁さくら散る

養老駅に吊る瓢箪やうらなる

「日本海」列車を覆ふ別れ霜

島原の足湯賑はふ春日和

亀鳴くを聞きつ禁酒を誓ひたる

寄せ書を読返しをり卒業子

山国に山車のからくり春を呼ぶ

春満月誕生の子の名は快光かいとく

庭守の丹精実る芝桜

三椏の花を見上ぐる羅漢かな

桜えび加へ創作新メニュー

老僧といふ名の茶碗春深き

スカーフが防ぐ花冷疏水道

筍の歯ごたへ弾む美術論

青空の余白を埋めて白木蓮

凜として義務教育を卒業す

打刷毛の音とんとんと利休の忌

歩を打てばぱちと快音春日和

鷺見たえ子

桂 敦子

北田 敏子

木戸 宏子

池田加寿子

伊藤 和子

稲田 和子

大越 義雄

渡部 法子

山内 節子

山崎 里美

山崎 真義

山本 丈夫

吉田 宏之

吉田 希望

横田 矩子

松田 和子

松田 洋子

秦 和子

福本すみ子

藤本 秀機

琥珀集

花菜風

鈴木 照子

屋根を葺く若き棟梁揚雲雀（美山町）

放水銃戸毎に美山花吹雪

茅葺の屋根裏高し囀れる

茅葺の家に新調鯉幟

花菜風母屋に残る牛の部屋

仙人掌の垣なき生活蓬餅

春眠を覚ますベル音電子音

四月馬鹿

塩路 五郎

牛市

山口キミコ

園児らに人気のゴリラ山笑ふ

百千鳥樹木の鼓動促せる

髭剃りしゴッホ自画像四月馬鹿

古民家の庭の菜の花明りかな

杉花粉大仏様の無表情

初燕卯建の屋根を掠め飛び

筆箱にトンボ鉛筆昭和の日

売られゆく仔牛の涙春愁

タグ付けし仔牛の値踏み春ざるる

もうもうと親恋ふ仔牛春の市

牛糞の流るるマイク木の芽風

牛市の仔牛並べて春の糞

七ヶ月育てし黒毛春別れ

山陽道西へ行くほど春深き

桜鯛

花の雲海津の浜にたなびける
花の報散るぞ散るぞと脅かす
磯桜湖のさざなみ寄せ返す
花見舟海津大崎見頃なる
花の闇闇魔出さうな地藏堂
花冷や大社にジャズのコンサート
嫁ぐ子に料理伝ふる桜鯛

父子

折鶴に息吹きこみて朧の夜
物思ふときの頬杖春憂ひ
お揃ひの顔した父子や花は葉に
転がりし小銭追ひかけ日の永き
凜々しさや七つボタンの入学児
新体操のリボンくるくる風車
忘れたくなき人の居る春の京

竹内 悦子

伎芸天

花衣着せてやりたし伎芸天
母の日のパステルカラー植物園
遠目にも薄墨桜西の京
春潮や釣船進む阿波の水門^{みと}
揚ひばり平城宮をほしいまま
スコップに伝はる温き春の土
春風や匠の技のかづら橋

森下 康子

花万朶

花万朶邪宗の邑を逍遙す
春光を受けて右近の十字剣
四月馬鹿大阪駅に迷ひけり
長閑さやバリアフリーに助けられ
コンビニの弁当開く花の下
フアーブルは子の愛読書夏隣
はんなりとさくら小紋の春裕

笠井 清佑

田下 宮子

花筏

坂上 香菜

蛤のすまし

常田 創

拝観を請へる土間にも燕の巢

家ごとに放水銃や春北風(美山三句)

門柱に止まりし燕美山村

辛夷咲く里は茅葺鳶の笛

酒蔵の裏は濠川花筏

黄桜や酒饅頭の屋台立ち

花吹雪十石舟の行き交へり(伏見)

春限定

辻

香秀

春炬燵

北尾

章郎

雨上り密かに木々の芽吹く音

春雨に濡るる花街薄あかり

椿みな雨にうたれて色深き

見て楽し春限定のみやげ店

桜咲き吹雪となりて幕おろす

紫木蓮ワイングラスのさまにかな

初蝶は気の向くままに舞ひ遊ぶ

独眼竜政宗ごっこ風光る

死んだふりしている男の子クローバー

春光やフランスパンの紙袋

塾講師然としてをり目借時

静脈の透けゆくこち夜の桜

銀輪や帰路につく夜の桜東風

シゴトノハナシ蛤のすましかな

雛飾る内裏の左右を姦しく

納税期笑顔忘れし女将かな

有難うと御礼の絵馬や梅香る

老梅の洞のアートや花盛り

とろとろと弥陀に招かれ春炬燵

朝寝して何も言はれぬ頼りなさ

種袋写真信ずるほかは無し

熊野古道

坂根 宏子

ヒアシンス

宮田 香

つづら折を息継ぎ登り花馬酔木（熊野古道五句）

赤木越の道標十一暮遅し

山道具のこす廃屋落つばき

熊野道チエンソー響く春仕事

森の春船玉宮の狛は龍

お松明火の玉となり闇駆くる（修二会二句）

肩に灰残して修二会果にけり

熊野界限

片岡久美子

花篝

小林 成子

母遠し見てみて飽かず春の波

うぐひすのこゑ藍色に南紀浜

洞窟に碎ける怒涛春日差

水軍の番所跡なり春の闇

合戦に馳せし水軍海おぼろ

煌めきや太平洋の春の潮

洞窟に千古の息吹彼岸潮

傾きはその身の重さヒアシンス

蒲公英やままごと遊びの草サラダ

諍うて辛子多めの花菜和

灰色のソーラーパネル春遅し

夕暮や緋の桃殊に色を増し

手作りの牡丹餅大小彼岸かな

川挟み鳴き交はすかに花見鳥

手伝ひにならぬ児ら寄り雛納

宮址野に誰が横笛や花篝

皇子の碑や五色椿の散りつげる

氷室社のしだれ桜に刻忘じ

花ふぶく句碑歌碑いくつ佐保堤

散策路児の手にしかと花齋

久闊の友より届く莢豌豆

瑠璃集

島の春

高谷 栄一

長閑なる潮さす浦の小波かな
よりどりの干物を選び島の春
しまなみの甘酢あんかけ桜鯛
水彩の色を遊びて紅枝垂
疾痛の過ぐるを待てり春嵐

花菜色の列車

井口 淳子

卒業す微分積分苦手な子
花菜色の列車うららに夢乗せて(房穂半島のいつみ線)
太極拳落花浴びつつ気を吐ける
重たげに簪に浮かぶ桜かな
ひたすらに生きし国民昭和の日

竹の秋

中川すみ子

石積の化粧井戸なり竹の秋
梅が香に日照雨いく度小町寺
枕木の三步を跳びて春の川
上人のご前百畳春寒き
あたたかやエレベーターに三つ子載せ

しらを

国包澄子

鶯に敷売る話聞かせざる
幼さの残る顔して卒業子
霾や老眼知らぬ目に涙
けん玉の虜となれる日永かな
句読点ほどの目玉のしらをかな

桜狩

紀川 和子

鉛筆の芯の尖りや木の芽どき
金色の鳳凰天へ風光り
一期一会まみえし人と桜狩
人に酔ひ花に酔ひけり原谷苑
友頼りに行って来ました桜見に

六月号月評

塩路 隆子

今月も瑠璃集からの月評をさせていたたく。再度NHKなど、五句を投句している人達に焦点をあてようと思う。

太極拳落花浴びつつ気を吐ける 井口 淳子

日本でも中国でも、朝早くから公園などで太極拳をしている人をよく見かける。落花を浴びながら、気を吐きながらゆるやかな動きを見せながら…。「気を吐く」の措辞に臨場感が出ている。

鶯に敷売る話聞かせざる 国包 澄子

敷に住みついている鶯なのだろうか、いやそれは関係ない。いま春を謳歌して鳴いている鶯に敷を売る話は聞かせたくないと言う、「聞かせざる」の強い語尾に作者の優しい気持ちをうまく表現された。

よりどりの干物を選び島の春 高谷 栄一

のんびりとした島の様子、たたくまいがうまく表現さ

れた句である。おだやかなお人柄なればこそその句の出来栄である。「よりどり」の上五と「島の春」が相照らし合わせ良い句に仕上がっている。

あたたかやエレベーターに三つ子載せ 中川すみ子

この作者も穏やかで銜いのないお人柄である。マンション住まいの作者が、エレベーターで見られたのは、三つ子の赤ちゃんを載せたベビーカーとお母さんであろう。ほのぼのとした暖かさが伝わる句である。

鉛筆の芯の尖りや木の芽どき 紀川 和子

木の芽の頃になれば裸木がとくに目立つ。くつきりと描く枝々から、柔らかい新芽が出る頃には、その尖りから作者は鉛筆の芯を想像されたと言う。面白い発想であり、感性のいい句に仕上がった。

・スーパ―に若き尼僧や春キャベツ 小西 和子

「スーパ―」で出逢った「尼僧」との意外性、「若い尼僧」と「春キャベツ」の新鮮さ、しなやかさの取り合わせの妙を得た作品である。感性のいい作者の今後に期待を大にしている。

(以下略)